

あつる

Treasure every meeting as it's chance to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 23

太平洋戦争で米軍の空襲を受けたのは本州だけではない。北海道もほぼ全域で大きな被害を受けた。この攻撃を北海道空襲という。

釧路市空襲

昭和二十(一九四五年)七月十四・十五日、両日にわたって北海道が空襲された。早朝からB29及びアメリカ軍機動部隊の艦載機が軍事施設、海陸の交通機関及び市町村に対し、爆弾、焼夷弾、機銃で波状攻撃を仕掛けてきたのだ。

十四日正午の北部軍管区司令部発表によると、この日北海道に襲撃したのはB29約二〇機と艦載機延べ三〇〇機。

まず釧路市では、早朝に一度、港湾付近を攻撃して立ち去ったグラマンF6Fなどの艦載機が、午後二時五〇分、再び大挙して来襲。一時間四〇分にわたり繁華街や工場、学校、漁船、鉄道などを銃爆撃した。

攻撃開始一〇分で火災が発生したが、四、五〇メートル低空からの機銃掃射のため、消防隊は出動できず。燃えるに任せた延焼をやっと食い止めたのが午後七時頃で、鎮火までにはなお九時間を要した。

艦載機一四二機の八波に及ぶ大規模な空襲により損壊家屋一三七五戸、六二一人が被災。死者は一九三人といわれる。直撃弾よりも、火災が原因で亡くなる人のほうが多かった。「空襲の時は防空壕から出るな」という命令を守ったため、多くの市民が防空壕の中で窒息死したのだ。

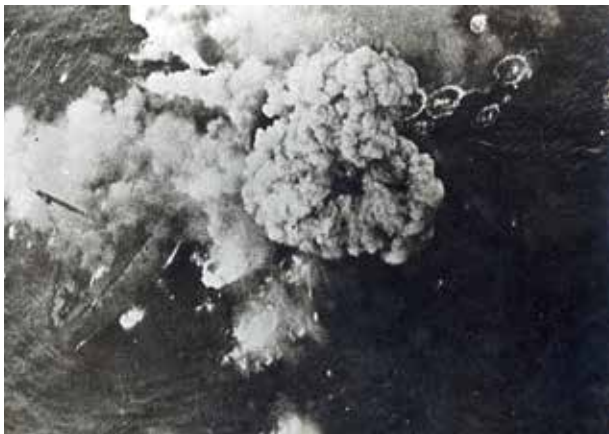
根室市空襲

根室市は沖合三キロ付近の航空母艦から発進した艦載機延べ二五〇機の集中攻撃を浴びた。

午前五時に始まり午後四時半まで、投下された爆弾は二五〇キロの大型を含め

一二一発。午前一〇時頃、空襲が約四〇分中断した間に市民を郊外に避難させるのが精一杯だった。

根室市も絶え間ない機銃掃射のため、



猛火に包まれた第三青函丸（函館市中央図書館所蔵）

焼夷弾で起こった火災の消火作業ができず、翌日午前二時に一応鎮火するまで、延々一九時間も燃え続け、街の七割余りの二四五七戸を焼失し、一面焼け野原となった。

死者は陸上で一九九人。ほかに基地のあった北千島への供給を断とうと、港内外の船舶が攻撃され、一七〇人が死んだ。

狙われた連絡船

青函連絡船も全て襲われ、北海道と本州を結ぶ動脈が絶たれてしまった。

十四日午前五時八分、函館港から青森へ向かった「第四青函丸」が、上磯の葛登支岬沖で延べ八機の艦載機の銃爆撃により沈没したのをはじめ、この日だけで八隻が沈められた。アメリカ軍機は一〇機前後、時には二〇機がひとかたまりとなって一隻、また一隻と狙い撃ち、次々に沈めていった。沈没しても漂流者になおも執拗に銃撃

を加え、人々は海中に潜って難を逃れたという。しかし、銃弾から逃れられても、そのまま海中に没して行方不明になった人も少なくなかった。乗組員の犠牲は三三二人、全体での死者は四三〇人にのぼった。

この青函ルートの壊滅により、京浜工業地帯の燃料源だった北海道の石炭は行き場を失い、日本の敗戦が決定的になった。

最大の被害地、室蘭

室蘭市民は十五日、空襲警報下、防空壕に身を縮めながら艦砲射撃の砲声を聞いていた。

攻撃してきたのは、アイオワ、ミズーリ、ウイスコンシンンの戦艦三隻を主軸とし、軽巡洋艦二隻・駆逐艦八隻を従えた一三隻の機動部隊。

前日の十四日に室蘭市内と港をB29や艦載機が銃爆撃し、港の内外で海防艦、汽船一四隻を撃沈、炎上させていたが、この日は目標を変え、午前九時三十分から一〇時三十分までのちょうど一時間、幌別沖約三〇キロの洋上から軍事工場地帯の輪西方面に一〇〇発以上の艦砲射撃を加えた。

艦隊から叩き込まれた砲弾は、日本製鐵、日本製鋼所の構内や周辺の住宅街を正確に捉えていた。日本製鐵構内の被弾は三三一発。施設に致命的な損傷を受け、工場関係だけで従業員八三人、家族九九人が死亡。国内唯一の高射砲生産工場であった日本製鋼所第六工場は完全に破壊され、その他の工場も三〜一〇日間の操業停止に追い込まれた。

この二日にわたる攻撃で、室蘭市は工場のほか、一九四一世帯、八二七人が被災。



艦砲射撃の被害 日本製鐵株式会社（室蘭市役所総務部総務課所蔵）

一般市民の死者は四三六人を救えた。

その他、函館市、小樽市、帯広市、旭川市など七九市町村が攻撃され、罹災人口三万三四〇〇人、死者二〇〇〇人を超える大きな被害を出した。死者の大半が非戦闘員という、アメリカ軍の一方的な無差別攻撃だったのだ。

しかし、なぜか札幌市は、道都なのにはほとんど被害に遭っていない。空襲はあるにはあったが、死者は一人のみだった。それはアメリカ人が造った街だから、と信じて疑わない札幌市民も大勢いるが、終戦後、無傷の建物がアメリカ軍の進駐拠点となったことも事実である。

北海道から本州の工業地帯へ 石炭を運ぶ青函連絡船と 室蘭の製鉄・製鋼所の壊滅で、 日本の敗戦は決定的となった。

あつろの杜

北海道大学公共政策大学院特任教授
小磯修二さん

Interview

経済学者で地域開発政策のエキスパート、小磯修二さん。地方の活性化には、支えとなる建設業の頑張りが大事。その役割を理解してもらおうと本を書き上げた、小磯先生のお話です。

なぜ北海道に？

七〇年安保世代だったので、大学時代、社会人としてどういう道を歩むべきか、いろいろ悩んでいた時に、海外へ貧乏旅行に出たんです。

ヨーロッパのフランス・イタリア・ドイツなどの地方を回ると、本当に美しいし、輝いているんですよ。フランスに行くと、自分たちの地方のことを「テロワール」という。「テロワール」＝「テリトリー」。すなわち自分たちの領土ですよ。どこかの地方に行っても、自分の住む所に非常に誇りを持っている。その誇りが、きれいな街並み、統一のとれた景観など、魅力のある地域をつくり出している。

昭和四五年には、山田洋次監督・倍賞千恵子主演の『家族』という映画を見ました。九州の炭鉱から日本列島をずうっと北上し、最後は中標津の酪農地帯に辿り着く。ラストの美しい酪農地帯の景観に魅せられ、北海道を旅行しました。

地域を支えている産業の実態を…



考えてみるとパスポートはいらないし、日本語も通じるし、ヨーロッパよりも魅力がある。こういう地域が日本の中にあることに気がつきました。それで自分は、今後地方の問題に関わっていきたくない、と思ったのです。

現在、地域開発政策という分野を専門に、北海道以外の国内外でも活動していますが、海外から見た場合、北海道は明治の開拓から



小磯修二
こいそ しゅうじ

1948年大阪市生まれ。京都大学法学部卒業。北海道開発庁(現国土交通省)等を経て、1999年に釧路公立大学教授、地域経済研究センター長。2008年同学長を務め、2012年から現職。専門は、地域開発政策、地域経済。実践的な地域課題解決を目指す研究活動に取り組み、これまで30以上の研究プロジェクトを組織。中央アジア等での経済協力活動にも従事。著書は、『地域自立の産業政策』(イマジン出版)、『戦後北海道開発の軌跡』(共著、財団法人北海道開発協会)、『地方が輝くために』(柏艸舎)、『commons 地域の再生と創造』(共著、北海道大学出版会)など。

始まって、だいたい一〇〇年で人口五〇〇万人、経済力ではヨーロッパの中堅国であるデンマーク・フィンランド位の規模を有する地域になったわけです。先進国の中でこういう事例はまずない、奇跡的な地域開発だといわれています。

「米チエン」
北海道で頑張っているものにお米があります。一九九七年、道民が道産米を食べる食率は三七％に過ぎなかったのに、二〇一三年にはなんと九一％。私の計算では、それまで道外に漏れていた四七〇億円位のお金が、北海道の中で回るようになった。これによって、

六〇〇億円から七〇〇億円、北海道のGDPが高まりました。

なぜ北海道でおいしいお米が生産できるようになったのか。

一つはお米の品種改良が実を結んだということ。もう一つは、おいしいお米を作り、成果を上げた生産農家だけが次の年も生産できるという、思い切った競争原理を北海道が導入したからです。その結果、米作りへのモチベーションが高まり、おいしいお米が生産されるようになった。これはすごく大事なことで、私は高く評価しています。

今アジアの富裕層の食市場においても道産米は高い評価を受け、グローバルな産業となりました。食の分野以外でも、同じ気持ちで道民が取り組んでいけば、私はまだまだ北海道には可能性があると思いますね。

『地域とともに生きる建設業』
国の政策だけに依存せず、地域が自分たちでどこまで頑張っているのか？ 私の活動の関心はそこにあります。そういうふうに見ていくと、建設業で働いている人は、今だいたい全国で五〇〇万人。数の面でも役割の面でも地方を支えている大事な産業です。

冬、道路の除雪は大変ですよ。夜中に作業して、明け方にはきつちり道路の雪を取り除くという、いわゆる縁の下の力持ちです。それと防災。非常時がそうですよね。災害があったときに最初に駆けつけてくれるのは、建設業の人たちなんです。

私は釧路で一三年間活動していましたが、命の危険を感じるものが二回ありました。一度は、国道で起きた雪崩。後ろを見ると車がずうっと続いていて戻れないし、雪崩がまた来るかもしれない。そういう状態の中、じっと待っている。地元で建設業者の除雪車が駆けつけてくれた。

次はごく最近なんです。標津町で仕事があり、終わって釧路に戻って来るときに、ホワイトアウトに遭った。全く前が見えないのに走らざるを得ない。これ、恐怖ですよ。そのときに、地元の救助隊が道路の向こうから来てくれた。これも地元の建設業です。パトカーでも消防車でも救急車でもないんです。地元の建設業者が、自然災害に遭遇するときに駆けつけてくれる。

いざというときは、自分たちの地域を守る。そういう建設業の実態を、今回の出版で、少しでも理解してもらえればと思いますね。

「忙しい」

現代人は挨拶の時、「忙しそうですね」「忙しい？」というフレーズをよく使います。

ですがもし、これらの言葉を使って江戸時代の人々に話しかけたりすると、彼らは顔を青くして怒るに違いありません。

なぜかというところ、「忙」という漢字が、心を表す「りっしん偏」+「亡ぼす」、すなわち心を亡ぼすと書く悪字だからです。

江戸っ子は心を何よりも大切にしました。心がなければ人ではない、という認識があったため、「忙しい」と言われると、「心がない」と言われたように感じてしまうのです。同様に「忘れた」という言葉も、「心から姿が消えた」という意味を持つ悪字のため、江戸っ子には嫌われました。

友達に「どうしてた？」と聞いたら、「仕事が忙しくて時間がないし、考えることもあってさ、ついつい連絡するのを忘れてた。ごめん！」。こんな答えは、江戸っ子にとっては最も許せない、最低の言い訳なのです。

「忙しい」は、前述のとおり、心を亡くすのですから、まずその状態がもつてのほか。江戸っ子は仕事をしながら考えるのが当たり前。歩きながら、学んだり、考えたりしたのです。仕事は即学問、時間をとって考えるなんて無駄だし、野暮というわけです。

「善は急げ」と身軽に動いた江戸っ子たち。やってみれば善し悪しも分かるし、悪ければ改善すればいい、ということなのです。

それでは「忙しい」に替わる言葉とは何だったのでしょうか？ それは「ご多用」です。「ご多忙」とは言わずに「ご多用」と悪字を避ける。そんなさりげない心遣いのできる人間になりたいものです。

O W L I N F O R M A T I O N

海洋教育を担う「練習船」の姿

北海道大学総合博物館2014年度夏季企画展示
学船 洋上のキャンパス おしよ丸
7月11日(金)～11月3日(月・祝) 9:30～16:30(11月1日以降は10:00～16:00)
北海道大学総合博物館(札幌市北区北10条西8丁目 TEL 011-706-2658)
休館日/月曜日・9月7日(日) ※月曜日が祝祭日の場合は開館し、翌日が休館日
入館無料

北海道大学水産学部の練習船「おしよ丸」は、学部開設もない1909年配属の初代「忍路丸」から名を受け継ぐ、水産・海洋学研究者育成のための「学船」です。今夏、数十年ぶりに行われる代替わりを機に、日常触れることのない洋上教育の現場を紹介する企画が実現しました。

会場には歴代「おしよ丸」の模型をはじめ、ゆかりの品を展示。設置されたモニターでは、博物館映像学の研究者が2013年に取材した、学生教育や研究者による研究解説、航海の安全に尽力する乗組員の姿、さらに新船「おしよ丸V世」就航式などを、迫力ある映像で放映しています。

企画展では開催を記念し、同名の書籍を一般発売。洋上のキャンパスの実際を誌面でもお楽しみいただけます。



1929年に理学部本館として竣工した博物館。風格ある建物はそれだけで一見の価値がある

その時代、撮影者によって、写真が表出する。

札幌国際芸術祭2014連携事業 札幌市写真文化振興事業 受託企画展
「表出する写真、北海道」展
9月2日(火)～21日(日) 10:00～20:00
コンチネンタルギャラリー(札幌市中央区南1条西11丁目 コンチネンタルビルB1F)
※お問い合わせ/北海道を発信する写真家ネットワーク TEL 080-3238-9840
入場無料

北海道はその開拓の当初から写真に撮影され、140年を経た現在に至るまで、多彩な写真世界を生み出す舞台として、自然と人間が調和する風土を育んできました。

NPO法人北海道を発信する写真家ネットワークでは、2011年から札幌市所蔵の写真をもとにした「写真で綴る札幌」展を開催。今回はその延長線上にある企画となります。総勢28名の撮影者による北海道を被写体とした写真には、撮影者が意識的・無意識的にとらえた、見たもの、見ようとしたもの、見るべきと訴えられたものが映し出されています。

明治初期の田本研造「開拓写真」に始まり、人々の暮らしを撮り続けた掛川源一郎、北海道を空からとらえた清水武男、篠山紀信などの幅広い層の作品を紹介。歴史の中でこの土地がどう変わり、また変わらずにきたのかを、写真に切り取られた場面の中から探ります。



創成河群 1935年頃
「札幌市写真帖」より
中西寫真製版所

知られざる建設業の意義と魅力!

地域とともに生きる 建設業
小磯修二・著
定価1,500円+税

建設業は地域にとって、経済的な力であるだけでなく、催事への協力から災害救助に至るまで、大きな役割を持つ産業です。

風土に根ざしたその実際を、地域政策を領域とする研究者が取材。「地域自身がどのように活気ある社会を作っていくのか」を見つめる視点での提言からは、地域の情報に精通し、運命共同体として発展の鍵を握る「地域産業としての建設業」の新たな姿が見えてきます。



中西出版
四六判、252頁
2014年8月刊行

下川町「森林未来都市」への挑戦

エネルギー自立と地域創造
森林未来都市 北海道下川町のチャレンジ
下川町・編著
定価1,000円+税

面積の9割が森林という林業のまち、下川町。基幹産業の衰退による人口減少と少子高齢という課題の解決を目指し、同町は「持続可能な地域社会」実現を掲げ、地域資源を活用する取り組みを続けています。

「木質バイオマス」でのエネルギー自立と集住化、森林総合産業の創造による雇用の創出など、町内の「一の橋地区」地域復興プランにスポットを当て、循環型の地域モデルを示します。



下川町(発売元:中西出版)
A5判、80頁
2014年8月刊行

さあ、山へ行こう

はじめてのさっぽろ山ガール
バビシェ・マウンテンクラブ・著
北海道新聞社・編
定価1,500円+税

かわいいファッションで山を楽しむ「山ガール」。「でも、何から始めたらいいの?」というビギナー山ガールにおすすめの本が登場しました。

季節ごとのファッションはもちろん、必要な持ち物選びのポイント、山登りのマナーやルールなど「山の基本」を丁寧に解説。21山を紹介した難易度別登山ガイドでは、ルートや高低図、所要時間が一目で分かる図に加え、周辺の立ち寄りスポットも掲載しています。



北海道新聞社
A5判、160頁
2014年5月刊行



北海道立文学館の館長に池澤夏樹氏が就任した。全国的には作家が務めることは珍しいそうである。芥川賞作家の氏が、個人編集である「日本文学全集」(全30巻)を今年11月から刊行することや、作家・福永武彦氏のご子息であるという経歴は耳にするが、実は氏が、ワープロ原稿で芥川賞に応募し受賞した最初の作家であるということを知った。文学館の館長就任と自らの作品の電子出版化という二つの報に意外感を抱く向きもあるかも知れないが、氏には齟齬がないということだ。ところで「あうるの杜」登場の小磯修二氏は札幌市立中央図書館の電子図書館サービスの実現に協力された方でもある。この秋には館外利用が開始される予定で、池澤氏が提携したポイジャー社の閲覧システムが利用されていると聞く。(Y)

■発行・編集/中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-14
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
■発行責任者/林下英二
■発行日/2014年8月30日



http://nakanishi-shuppan.co.jp